

高井戸YA新聞

春

2017



図書館



高井戸図書館で、詩の講座の講師を
してくださっている、林 佐知子さんから、
素敵な詩を頂きました❀
みなさんもぜひ、図書館でのひとときを
楽しんでいってくださいね♪

図書館へ行こう

林 佐知子

玄関を入れば
何万冊の本が
いつせいに 迎えてくれる

どれを読んでもいい
何を借りてもいい
何時間過ぎてもいい
赤ちゃんからお年寄りまで
だれにでも 開かれている

ここは 身近な地域の書齋
古今東西ジャンルを超え
文化の香りに満ちあふれた
とっておきの場所

でかけてみませんか
「知る」と「感じる」が
キュキュツと 磨かれる
図書館へ

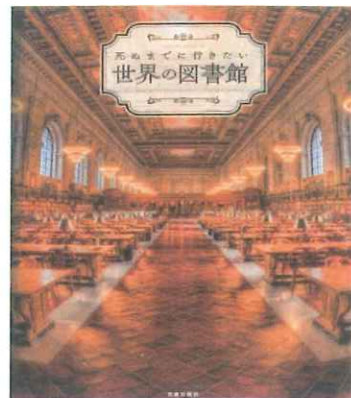


『図書館ホスピタル』 みはぎ 三萩 せんや 著／河出書房新社
「元気があれば何でもできる」と信じていた悦子だが、
就職活動に失敗し、無職の春を迎えてしまう。
そんなある日、おばさんが紹介してくれた図書館の仕事。
本を読まない悦子が働き始めた「しらはね図書館」には不思議な
うわさ噂があった…。

『晴れた日は図書館へいこう』 緑川 聖司 著／ポプラ社



かやの茅野しおりの日課は、いとこのみやこ美弥子さんがししよ司書をして
いる、雲峰市立図書館へ通うこと。
そこでは、本にまつわる事件が起きていて…。
図書館で起きるいろいろなミステリーを、主人公が
解決していく、図書館好きにはたまらない一冊。



『死ぬまでに行きたい世界の図書館』 かさくら 笠倉出版社
これが図書館？
世界には溜め息が出るほど美しく、じゆうこう重厚でかくちゆう格調高い図書館が
存在します。入館料が必要なところもあるほど、歴史ある、
貴重なけんちくぶつ建築物としての一面もあります。
あなたのお気に入りの“知と美のほうもつこ宝物庫”を探してみては？



『アリスのうさぎ』 齊藤 洋 作／偕成社
とある事情により、図書館の〈児童読書相談コーナー〉で働くこと
になった「わたし」のもとに、ちょっと不思議な体験をした人たちが
話をしにやってくる。
現実と非現実の境界線を行き来する、連作短編小説です。

『ことり』



小川 洋子 著／朝日新聞出版社

人間の言葉は話せないけれど、小鳥たちをこよなく
愛し、そのさえずりをよく理解し、独自の言葉で
語りかける兄と、その言葉を唯一理解する弟。
兄弟は小鳥たちの声に耳を澄ましなが、
常に寄り添い、つつましい生活を送っていた。
兄亡き後、静かで控えめな弟の生活の中に、
小さな楽しみが生まれる。

それは、図書館で鳥に関する本を次々に読んでいくことと、
自分に声を掛けてくれた、ししよ司書の女性へのあわ淡い思いだった。
じゅんすい純粋な兄弟の一生を、切なくも美しく綴った、心にしみる一冊です。